

幸せのお節介のバトンリレー

茨城県立勝田中等教育学校 2年 宇都野 真

「今度、お父さんの職場に半年間インドネシアの人が来るんだ。」夕飯の席で父が言いました。そのインドネシアの人、ジャファールさんは敬虔なイスラム教徒で、日中も礼拝をしなくてはならないので、職場の中にお祈りをする場所を作ってあげる必要があるそうです。また、ジャファールさんとその奥さんは、僕たち一家が住む社宅に住むことになったので、父は色々なつてを使って、使っていない家具や電化製品を集めて、家のガレージに保管して置いてあげていました。やがて数週間後の土曜日です。「今日の夕方、ジャファールさんが来るよ。」と父が言いました。父が預かっている社宅のカギを受け取りに来たジャファールさんと奥さんにお会いしました。僕たちとは肌の色が違って、少し濃い顔立ちです。奥さんは頭にヒジャブというスカーフを巻いていました。ですが、びっくりしたのはそこではありません。奥さんのお腹がすごく大きいのです。母が奥さんに、「予定日はいつですか。」と聞いたところ、なんとあと一ヶ月で出産予定だそうです。ジャファールさん達がいなくなってから、父と母が相談していました。ジャファールさん達は今晚届く荷物を待たなくてはならず動けないこと、宗教上の理由からハラルというイスラム教で認められた食材しか食べることができないが、そんな食材は僕の家近くには売っていないこと等でした。そして、父と母が出した結論は、父が引越しの手伝いに行き、母と兄と僕とでハラル食材を探しに行くという

ことでした。「それってお節介じゃない？」と兄と僕が言うと、父と母が言いました。「想像してみて。外国で、今夜食べる物が無い状態で、しかも体がすごく辛い状況に自分になっているところを。」母もハラル食材を買ったことはありません。しかし、家から車で十分ほどのところにある店に、ハラルが置いてあるという看板があるそうです。でも大変なのはここからでした。ハラルのコーナーにあるのではなく、広い店の中のあちこちにハラルの食材があるのです。ハラル食材には必ずハラルの印があります。その印を探して、僕たちは広い店の中の全ての棚や冷凍の品を一つ一つ手に取って見て回りました。豆の缶や調味料、冷凍の鶏肉等、思った以上にたくさんの品があり、僕たちの買い物は段ボールいっぱいになりました。それをジャファールさんの家に持っていき、大丈夫かを確認してもらいました。ジャファールさんも奥さんもすごく喜んでくれました。僕も嬉しくなりました。

父と母は、「色々な所で色々な人に助けて頂いたからこそ幸せな今がある。だから、そのバトンを次の人に渡したいんだよ。」と言います。僕にもいつか世界のどこかで、誰かを助ける日も、逆に誰かに助けてもらう日も来ることでしょう。僕は、この「幸せのお節介のバトンリレー」をこれからも途絶えることのないように、ずっと、ずっと、未来へとつなげていきます。